

## 150 年前の今月 ー 日米関係の始まり

July 8<sup>th</sup>, 2003

I.Nishida  
(Richmond)

### 最初の日米交渉、オランダ語で始まった

今から丁度 150 年前の 1853 年 7 月 8 日（嘉永 6 年 6 月 3 日）、ご存知のとおりアメリカのペリー提督率いる 4 隻の軍艦が幕府のお膝元の江戸湾に来航し、鎖国を国是としてきた我が国に対し開国と通商開始を要求してきました。今で言えば超高压的な外圧でしたが、おそらくこれが日米間の最初の外交交渉になったといえます。

そこで、当時の交渉のありさまについて、若干勉強してみました。

まず、交渉用語としては、オランダ語が用いられました。

当時、日本側は鎖国下といえ、長崎でオランダを通じて細々ながら西欧との窓口を維持してきました。そして、江戸幕府は、この長崎の地にオランダ通詞といわれる語学専門家を継続的に養成していました。彼らは、オランダ語の通訳を専門の業とする家系の子弟で、その家系は約 20 家ほどあったといわれています。この家に生まれた子供は幼児の時から徹底的かつ体系的にオランダ語の語学訓練を受けていました。

そして、ペリー一行との交渉には、その通訳として日本側からオランダ通詞の堀達之助が、後に、森山栄之助が主席通詞として交渉の通訳を担当しました。

アメリカ側の通訳は、ペリーが上海で雇い入れたオランダ人のアントン・ポートランおよび中国語の通訳はサムエル・ウイリアムズでありました。文書としては、アメリカ側は、英語の正本に漢文とオランダ文の副本を添え、日本側は日本文に漢文、オランダ文を添えたものを用いました。（なお、日本側の漢文は古典的で格調の高い訳文であったため、アメリカ側のそれとニュアンスが合わないため翌年の交渉では漢文ははずされた）

交渉過程では、双方の誤解や、誤訳があり戸惑いも当然ありましたが、いずれにせよ日本側が鎖国下ではありましたがオランダ語という西欧語を維持してきたことが初めての対米交渉の成立に繋がりました。

見方を変えれば、この時、もしアメリカ側が強行に英語の使用を強要してきたならば交渉は不成立に終わったか、日本側に相当不利な内容押し付けられていたかも知れません。さいわいなことに日米双方にとって第 3 国のオランダ語

を交渉用語にしたことはある意味で対等の外交交渉でありました。

## オランダ通詞は英語を話した

ところで、日本側のオランダ通詞の堀達之助や森山栄之助が少々は英語を解していたことが分かっています。堀達之助は、一番最初米船に乗りつけたときに、**"I can speak Dutch."**と言ったそうです。また、後に通詞に加わった、森山栄之助は語学に優れた才能がありアメリカ側も彼の英語能力を評価しています。おそらく彼等は、**OFF** 交渉、非公式の場では英語で話しかけていたものと思われます。

実は、ペリーの江戸来航に先立つことの 45 年前、1808 年にイギリスの軍艦フェートン号がオランダ船と偽って長崎港に乱入し、オランダ商館のオランダ職員を人質にとったり、日本の役人を海に突き落とすなどの狼藉事件を起こしました。この大国イギリスの蛮行に衝撃を受けた幕府は急遽オランダ通詞に英学の勉強を始めるよう命じました。彼らは、オランダ商館員の指導を受けて英語の学習に取り掛かり、命令を受けてわずか 5 年後の 1814 年に日本最初の英和辞典「諳厄利亜語林」（単語数約 5900）を完成させています。このようにオランダ通詞はすでに英語の勉強も始めていたのです。

筆者はオランダ語の知識は全くありませんが、言語系統的にはオランダ語も英語も同じ北海ゲルマン語群に属するということであり、幼い子供時分より体系的にオランダ語の訓練を受けてきたオランダ通詞達にとって英語の勉強はそれほど天と地ほど違いはなかったものと思います。

## オランダ通詞に生の英語を教えたアメリカ・インディアンの末裔

ペリーの最初の来日の 5 年前にあたる、1848 年 7 月にアメリカの 24 才の冒険野郎が北海道の利尻島に現れました。彼は、名前をラナルド・マクドナルドといい母が北米インディアン・チヌーク族の酋長の娘でした。彼は、アメリカ・インディアンの祖先が日本から渡来した来たものと固く信じそのルーツ探しのため日本にやって来ました。彼は、アメリカの捕鯨船 **Plymouth** 号に便乗し、難破を装って利尻島に上陸しました。いうまでもなく当時は鎖国であり外国人

の彼は捕らえられ、10月に長崎に送られそこで幽閉されました。しかし、これを知った長崎のオランダ通詞たちが彼に英語の教を乞うこととなりました。マクドナルドは翌年の4月、米船 *Pleble* 号で長崎から離日することになりますがこの間、わずか6ヶ月間ですが、マクドナルドは、生のアメリカ英語を14人のオランダ通詞に熱心に教えました。そしてこの中に、ペリー来日時の通訳に当たった堀達之助、森山栄之助がいました。特に、マクドナルドは森山栄之助の語学能力には高い評価を与えています。

1849年4月5日に祖先のルーツの地、日本を離れた彼はその後、中国、南洋、インドなどを放浪してアメリカに戻り、死の間際には世話をしていた姪に「*Sionara, my dear, Sionara*」といったそうです。また、彼が残した文献「日英語彙」には、日本に滞在中に覚えた日本語に英訳が書かれており、そしてこの日本語が当時の長崎方言や武士の言葉を色濃く残していることから、日本語の国語研究にとっても貴重な文献といわれています。

(参考：日本にも海外密出国を試みた青年がいました。吉田松陰です。彼は、ペリーの二度目の来日時(1854年3月)、下田湾に浮かぶペリーの軍艦に乗り込んで「吾れ、米利堅(メリケン)に往かんと欲す」という漢文の手紙を見せて乗船許可をもとめました。しかし、ペリーは、鎖国中の日本側との開国に向けての交渉中であつたため余計な摩擦をさけるためこれを拒否しました。松陰は下田の幕府当局に引渡され囚人として獄中につながれました。)

## 埒外に置かれた英語達人 — ジョン万次郎

19世紀の半ばごろになると、日本近海の北太平洋は鯨の好漁場であるため米英の捕鯨船がかなりの数操業するようになっていました。すると、日本の沿岸航路や沿岸漁業で難破した日本人が偶然にこのような捕鯨船に救助されることも多くなってきました。このような日本人の漂流民の中で最もよく知られているのが、土佐の漁民・中浜(ジョン)万次郎です。

彼は、1841年(14歳のとき)漁に出たときに台風に遭い、鳥島で避難していたときにアメリカの捕鯨船に救助されました。彼の利発さを見込んだ船長の計らいで、万次郎はアメリカで航海・測量学などのかなりの高等教育を受け、9年後の1850年(23歳の時)、沖縄経由で帰国しています。(なお、万次郎は遭難時の仲間がハワイに留まっていた二人の帰国費用を稼ぐため、帰国途中カリフォルニアの金鉱山で働き費用を捻出しています。)

帰国後、彼は、長崎で踏絵をしてキリシタンでないことを証明し一年半後に故郷・土佐中浜に帰郷し、そのあとすぐに、高知に呼び出され藩弟たちに英語を教えています。

幕府は、1854年ペリーの二度目の来日時に、万次郎を通訳として用いるために万次郎を土佐藩から幕府直参として江戸に呼び寄せ待機させていました。しかし、『アメリカの恩義を受けてきた者を外交交渉の通訳に用いるのはいかなものか』という水戸斉昭公の意見がとおり、結局、英語に不自由のなかった彼は交渉の通訳として登用されませんでした。

当時日本でただ一人の英語の使い手であった万次郎が、日米交渉の埒外におかれたことには色々な見方があるでしょう。

私見ですが、外交交渉には相当な駆け引きや、緻密な翻訳、また、交渉を有利に導くために時間延ばしの作戦などもあったでしょう。このように交渉のテクニックとしてみた場合に当時の場面では英語ではなく第3国語を交渉用語に用いたことは正解ではないかと思います。万次郎は14歳の時から、英語に浸った分けですがその分、土佐方言でなく正統な日本語としての漢字・漢語の読み書き、意味の理解、また、文章力などで彼の日本語運用能力にはやはり疑問を持たざるをえません。

その後、万次郎は1860年（万延元年）、日本人による初の太平洋横断航海となる咸臨丸で勝海舟、福沢諭吉らとともに渡米しています。おそらくこのとき、万次郎は通訳、また、航海の知識で大いに活躍したに違いありません。

1864年、万次郎は鹿児島開成所の教授となり、明治政府樹立後は東京大学の前身、開成所で二等教授として英語を教えています。（当代一の英語の使い手であった彼が、一等教授でなく二等教授であったことは、彼の出自（武士でなく漁民）によるものとする見方があります。）

## その後の日米関係

現在、日米関係は、政治や経済、文化や人的交流の面でも非常に大きな機軸になるまで発展していることには誰も異論のないところでもあります。しかし、上に見てきたように、日米間の歴史はたった150年にしか過ぎません。（日本と中国との関係の歴史は1000年以上です。）

ペリーの1853年の来日後の1856年には日本は日米修好通商条約（蘭、露、英、

仏とも締結) を結び、ここに実質的に日本の 250 年に及ぶ鎖国の鎖は切り離されました。

1868 年の明治維新とともに日本は一気に欧米文明を吸収し、アメリカからも多くのものを学びました。そして、この欧米文化・文明の吸収手段に英語が大きな役割を果たしてきたことは事実であります。(英語を日本の公用語にしようとする動きもありました。(初代文部大臣・森有礼、黒田清隆らの欧化主義))

日本が近代国家として、急激に発展した過程で日米関係にも色々とギクシャクしたものが出てきました。

しかし、なんとといっても今から約半世紀前の 1941 年に日本は、無謀にもアメリカに戦争を挑みました。その結果は、アメリカにコテンパーにやられ東京は焼け野原となり(東京だけでなく日本の主要都市がほとんど空襲を受けた)、おまけに、広島、長崎に人類史上初の原爆を落とされ、結果、この戦争で何百万という人命を失うという大きな犠牲を払いました。

1945 年、日本に連合国による占領軍の総親分として来日したマッカーサー元帥は、日本を 12 歳の精神年齢の国だと断じました。(この 90 年前、ペリーは日本にどんな印象をもったのでしょうか?)

12 歳の子供といわれた我々は、それまでの軍国主義一辺倒から改めてアメリカから民主主義と自由市場経済主義という価値観を教えてもらいました。そして、アメリカの庇護の下、ウサギ小屋に住むワーカホリックといわれようが、とにかくサービス残業もいとわず、少々の公害排出、環境汚染にも目をつむり必死になって企業戦士として働きに働き続けてきました。その結果、50 年後の今、ふと気がついてみると日本はアメリカに次ぐ経済大国となりました。

自分史で恐縮ですが、戦後、アメリカ進駐軍の兵隊さんたちの記憶は今もあります。アメリカ人はでかくて背が高くカッコ良かった。遠足に行った時、駅のプラットホームでアメリカ兵が投げるチョコレートやチュウインガムに、はずかしながら群がった記憶もあります。また、街に、パンパンと呼ばれる女性達がたむろしていたのも見えています。

しかし、どうしてもアメリカに足を向けて寝られないのが、子供時分の空腹時に、小学校の給食にアメリカ軍が粉ミルクやバターを供出し援助してくれたことです。

当時の娯楽は映画が主で、アメリカ映画をよく見ました。ジョン・ウエイン、ゲイリー・クーパー、クラーク・ケブル、ウィリアム・ホールデン、マーロン・ブランド、グレゴリ・ペック、ヘンリー・フォンダなどみんな足が長くカッコよかった。エリザベス・テーラー、キム・ノバク、ドリス・デイ、イングリッド・バーグマン、グレース・ケリー、マリリン・モンロー、オードリ・ヘップバーンなどみんな金髪でもうウツトリするほど美人だった。どう見ても、

日本は小さく、貧しくて、アメリカは大きくて豊かでカッコよかった。戦後の子供時分に刷り込まれてしまったアメリカへの憧れ、このアメリカにちょっとでも近づきたい・・・、思い返せばこれが私の英語の原点でしょうか。(何のことはない、アメリカに対する劣等感からか・・・)  
以上。

#### (参考文献)

- ・ 「資料 日本英学史 1」(川添 哲夫、 大修館)
- ・ 「英学事始」(日本英学史学会、 日本ブリタニカ)
- ・ 「洋学の系譜」(惣郷 正明、 研究社)
- ・ 「英語襲来と日本人」(斉藤 兆史、講談社選書)
- ・ 「通訳の英語 日本語」(小松 達也、 文春新書)
- ・ 「英語と日本人」(大田 雄三、 講談社学術文庫)
- ・ 「英語講座の誕生」(山口 誠、 講談社選書)
- ・ 「英語学事典」(大修館)